

「学知アーカイヴ」としての藩旧蔵古典籍」 シンポジウム報告

白 井 純 (信州大学人文学部)

1. はじめに

本稿は、2018年3月15日（木）に信州大学附属図書館中央図書館セミナー室において開催した「学知アーカイヴ」としての藩旧蔵古典籍」シンポジウム（図1）の報告である。

シンポジウムでは、嶋田彩乃氏（諏訪市博物館学芸員）、山中さゆり氏（松代文化施設等管理事務所研究員）、西一夫氏（信州大学教育学部教授）、本稿執筆者の白井純（信州大学人文学部准教授）の4名の講師による講演、藩旧蔵古典籍の原本閲覧講習会、座談会を行い、相互交流の進展だけでなく、事実関係の整理と情報共有、研究上の新たな視点の提示を含む大きな成果を得ることができた。講演者と来聴者の各位に感謝すると共に、会場となった信州大学附属図書館中央図書館（以下、中央図書館）にも御礼申し上げたい。講演内容については本号掲載の論文をご覧ください。本稿ではシンポジウム開催に至る経緯と概要を中心に述べることにしたい。

2. 「学知アーカイヴ」とシンポジウム開催

信州大学附属図書館教育学部図書館（以下、教育学部図書館）の「藩文庫」は、飯田藩、高島藩、高遠藩の旧蔵典籍を中心として構成されるが、これらの典籍は、明治時代初期に県庁（旧筑摩県）に徴収された典籍が長野師範学校を経て教育学部図書館の所蔵となったものである。

この徴収は、滝澤（1989）によれば高遠藩での典籍の所有権をめぐる旧士族と平民の争いを調停するために行われ、他藩にも同様の措置が及んだものというが、徴収に抵抗する地元の意向もあり完全な徴収とはならなかった。その結果、地元に残された高遠藩旧蔵分は高遠小学校を経て



図1 シンポジウムのポスター

高遠町図書館所蔵「進徳館蔵書」となり、平成14年に教育学部図書館所蔵分が地元の強い要望により同館に委託管理され現在に至る（近年の再整理により、教育学部図書館に数点が残存することが確認されている）。明治時代に入って高島学校所蔵となった高島藩旧蔵分も徴収によって分裂し、地元分は高島小学校を経て現在の諏訪市博物館に「長善館資料」として所蔵される。飯田藩についても教育学部図書館の所蔵分がすべてである保証は無い。

したがって、旧筑摩県地域の藩校における蔵書形成のあり方や藩校間での蔵書構成の比較、教育制度と蔵書利用との関係などを研究するためには、所蔵機関の協力のもとで典籍を整理し、複雑な由来を明らかにしながら、それらを「藩旧蔵古典籍」として集約的にとらえる視点が必要である。

長野県にはこのような、地域の歴史、信仰、教育、文化のあり方を反映した文献や史料が数多く存在しており、様々な立場や関心をもつ人々によって継続的に調査されてきた。平成29年度には、信州大学人文学部において、これらを「学知アーカイヴ」として再評価し、横断的、総合的にとらえる研究計画が実行に移され、藩旧蔵古典籍の調査もその一角を担うことになった。

研究計画は、藩校、寺院、神社などに歴史的に蓄積されてきた長野県下の地域資料を「学知アーカイヴ」として整理・調査し、資料展示、フォーラム（ワークショップ・シンポジウム）、研究論文、目録データベースなどの手段で顕現化させることで、専門的な学術領域および一般の地域社会に向けた情報発信を多角的に行うことを目的としている。その成果として、人文学教育・研究のインフラ整備、関連研究の進展、地域資料の保全、地域資料の再評価による地域創生、などが期待されている。

歴史的に蓄積されてきた「学知アーカイヴ」とは、地域の人々が、地域に根差した生活の中で、その時々が必要によって付与してきた「価値」の総体である。しかしその価値は、藩校資料であれば廃藩置県による混乱、寺院や神社の資料であれば人々の信仰のあり方の変化といった社会変化の中で忘れられ易く、本来の価値が分からないまま失われてゆく危機に瀕している。また、仮に保管したとしても十分に活用されず、価値の再認識や再評価もされなければ死蔵するに等しい。「学知アーカイヴ」は活用され、それがもつ価値が地域の人々に理解されてこそ意味をもつ。信州大学が中心となって調査を進め、それぞれの地域資料が持つ意味を性格に理解したうえで、各機関や所蔵者と積極的に情報交換を行い、散在する知識を有効に結びつけ、それに基づいて各機関や所蔵者が地域の人々に向けた更なる二次的な情報発信を行うことで、「学知アーカイヴ」を中心とするネットワークが構築できるだろう。

シンポジウムは、このような見通しのもとで、「藩旧蔵古典籍」を対象として、これまで各機関において個別になされてきた蔵書整理や調査、保管と活用を、信州大学を中心とする知識と情報の共有によって円滑化・活性化させ、地域遺産「学知アーカイヴ」としての価値を再認識する機会となるよう計画したものである。

3. シンポジウムの概要

「学知アーカイヴ」としての藩旧蔵古典籍」シンポジウム報告

シンポジウム（図2）の構成は以下のとおりである。

- 10:30 - 10:45 「学知アーカイヴ」と地域創生 山田 健三（信州大学人文学部教授）
 10:45 - 11:10 藩旧蔵古典籍の概要 白井 純（信州大学人文学部准教授）
 11:20 - 12:00 高島藩「長善館資料」の概要とその移動経緯 嶋田彩乃（諏訪市博物館学芸員）
 12:00 - 13:00 昼休み
 13:00 - 13:40 松代藩真田家伝来の典籍について 山中さゆり（松代文化施設等管理事務所研究員）
 13:50 - 14:30 藩文庫の古典籍 西 一夫（信州大学教育学部教授）
 14:40 - 15:00 資料の見方と触り方—高島藩旧蔵典籍の原本閲覧講習会—
 15:10 - 16:00 シンポジウム

冒頭で山田健三人文学部長より、人文学部の研究プロジェクトとして「学知アーカイヴ」を掲げた意図について説明があった。

続いて白井から、調査中の藩旧蔵古典籍の概要について紹介した（内容については後述する）。

嶋田氏からは、諏訪市博物館に所蔵される「長善館資料」の由来について、蔵書印に注目した調査により、明治時代初期には高島学校の所蔵分と、高島学校を経由しない二つの蔵書の流れがあり、それらを統合して高島小学校の所蔵に至ることが

明らかにされた。また、明治時代に入ってからこれらの古典籍は学校の教育活動において活発に閲覧利用されていたという。明治時代には、近世の古典籍は捨てて顧みられないものではなく、敬して遠ざけるものでもなかったという事実は重要である。

昼休みを挟み、山中氏から、松代藩真田家を例として、藩（藩校）の蔵書と藩主の蔵書が原則として別のものでありながら、貸し出しなどによって融通しつつ利用されていたことが紹介された。大藩であれば、藩主や藩士の蔵書は独立したものと思われるが、中小規模の藩では実態としてどうだったのか注意しておく必要があるだろう。

最後に西氏から、教育学部図書館と諏訪市博物館に分蔵される高島藩の典籍全体を視野に入れた蔵書構成の特徴を、高島藩の教育課程と関連付けた講演があった。白井・速水（2017）による先行研究をふまえ、分蔵されてきた典籍の全体を明らかにし、蔵書構成の特徴を利用の側面から



図2 シンポジウム会場

分析した内容は大変興味深く、藩校図書についての今後の研究にとって重要な視点となることは間違いない。

その後、高島藩旧蔵典籍の原本を閲覧する時間を設けた（図3）。内容については特に準備せず進めたが、古典籍に詳しい参加者がそれぞれ即席で関心のある点から解説を加え、他の参加者は興味のある話を自由に聞く形式となった。古典籍といっても、興味関心の置き所はそれぞれで、紙型、用紙、装丁など書物の形に関するもの、蔵書印や蔵書群など書物の来歴に関するもの、歴史書、哲学書、文学書など書かれた内容に関するもの、文字、書体、言葉の使い方など日本語の特徴に関するもの



図3 原本閲覧講習会

など、古典籍の意義は見る者によってそれぞれで、一言で「面白い」といってもどこを面白がっているのか、いろいろな面白がり方があるということが、多少なりとも伝わったのではないかと思う。

この時間には中央図書館の多くの司書の参加もあったが、古典籍に触る機会が多くあれば、その見方、扱い方も分かり、得体の知れない蔵書として敬遠し、死蔵することは少なくなると思う。古典籍は破損していない限りは丈夫なもので、和紙は下手な洋紙より余程長持ちするから、取り出して閲覧したくらいでいきなり壊れるようなことはない。書物にとって湿度が大敵なのは今も昔も変わらないが、古典籍についても時々取り出して頁をめくり、正しく利用することが湿度調整の機会にもなり、保存上はむしろ好ましい。もちろん、閲覧に際してペンは使わない、机上に置いて読む、唾を付けてめくらないなど、いくつか留意すべき点はあるが決して難しいことではなく、閲覧の最初に注意すれば問題ないだろう。

最後に、講演の内容をふまえた座談会を行った。ここで講演のまとめを行ったが、参加者から講演者への質問もあり、共通の知識に立って様々な角度から藩旧蔵古典籍について考えることができた。詳しくは本号に掲載された講演者の論文をお読みいただきたいが、主催者の意図を超えた水準での論点もあり、想像以上に充実したシンポジウムとなった。参加各位、関係各位には改めて感謝したい。

4. 高島藩旧蔵典籍について

本稿の最後に、本稿執筆者の白井の講演について簡単に紹介しておく。

「学知アーカイヴ」としての藩旧蔵古典籍」シンポジウム報告

講演では「藩旧蔵古典籍の概要」として、これまでの調査の様子を紹介し、「高島学校目録」¹⁾と現存の典籍とを比較した白井・速水(2017)に基づいた報告を行った。

「学知アーカイヴ」の発想は、地域の歴史、文化、教育、産業などの特徴が蔵書構成に反映すると考える。そのための基礎作業として、個々の古典籍ではなく、資料群としての来歴を明らかにし、本来の構成を復元する必要がある。

高島藩旧蔵典籍は、教育学部図書館「藩文庫」に100点(「藩文庫研究会」により2018年10月確認)が所蔵されるが、諏訪市博物館に相当数(嶋田氏によれば「長善館資料」は全体で4,268冊)が所蔵される。高遠藩では明治維新に際して典籍の帰属をめぐる士族と平民が対立し、筑摩県による介入で、対立の原因となった古典籍が筑摩県庁に接收された。高島藩を含む他藩も同様だったと思われるが、使用中や貸与中の典籍は地元に残されたため典籍群の分裂が起こり、高島藩の接收分は旧長野師範学校を経て教育学部図書館の所蔵、地元分は高島学校などを経て高島小学校の所蔵となり、現在は諏訪市博物館の所蔵となったものである。

これらの経緯を整理して示す(表1)。白井・速水(2017)と大部分は同じだが、「高島小学校」を「諏訪市図書館」としていた論文の誤りを改めた。また、「藩校・国学校」から「高島目録」を経由しない蔵書の移動については、白井・速水(2017)では全く不明だったが、本号に掲載の嶋田論文で明らかにされている。

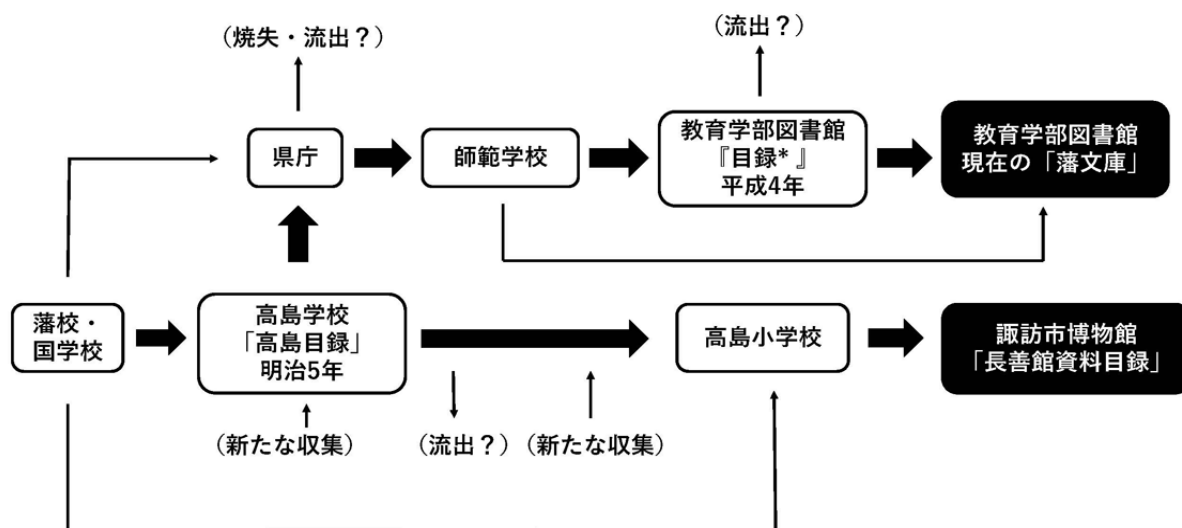


表1 高島藩関連典籍の移動(修正版)

「高島学校目録」は明治5年の県庁への報告の一部だが、目録上の分類では、国書135点、漢籍85点、西洋原書22点、仏訳書72点であり、教育学部図書館「藩文庫」高島学校分と諏訪市博物

館の「長善館資料」に一部は一致するが、一致しないものが多数ある。筑摩県庁に接收された関連典籍は火事で焼失したともいわれ、その他にも流出があったかもしれない。教育学部図書館の『目録』は正確には『「旧長野師範学校所蔵図書」及び「信州諸藩の藩校図書」目録』（1989刊）である。

典籍の来歴を知る手がかりは蔵書印にある。「藩文庫」の例では、飯田藩は「読書場」、松本藩は「松本藩学校蔵書之印」、高遠藩は「高遠文庫」、高島藩は「高島学校之印」が代表的である。但し、一つの藩、もしくはそれを引き継ぐ学校や機関で異なる蔵書印が押印された例も珍しくないようである。

教育学部図書館「藩文庫」と諏訪市博物館「長善館資料」の高島藩旧蔵典籍には「高島学校之印」が押されているが、蔵書構成の特徴として国書、特に和文の国書が多いことが挙げられる。詳しくは嶋田氏の論文を参照いただきたいが、諏訪地域には漢籍中心の教育課程をもつ藩校長善館が享和3（1803）年に設置され、長く藩校としての役割を果たす一方、明治2年に国学中心の国学校が新しく設置された。「高島学校之印」の蔵書印は、これら両方の蔵書を集めた蔵書群に対して、明治時代の高島学校時代に押印されたものとみられる。したがって、これらの典籍のすべてが長善館旧蔵典籍とは言えないのだが、藩校の典籍として一括され、総称としての「藩校（＝長善館）」の名称のもとで区別が曖昧になっていたことは否定できない。

高島藩旧蔵典籍については、江戸時代に押印されたことが確実な蔵書印が無いようであるから、明治時代に入ってから新たに蔵書に加わった古典籍に対して同じ蔵書印が押されてしまえば、藩校旧蔵古典籍との区別はつかなくなる。従来から藩校旧蔵古典籍とされてきたもののなかに藩校由来ではない古典籍があるという可能性に留意すべきだろう。

5. シンポジウムを開催して

以上が「学知アーカイヴ」としての藩旧蔵古典籍」シンポジウムの報告である。シンポジウムを主催した立場でこう言うのは手前味噌かもしれないが、講演の内容は非常に充実しており、

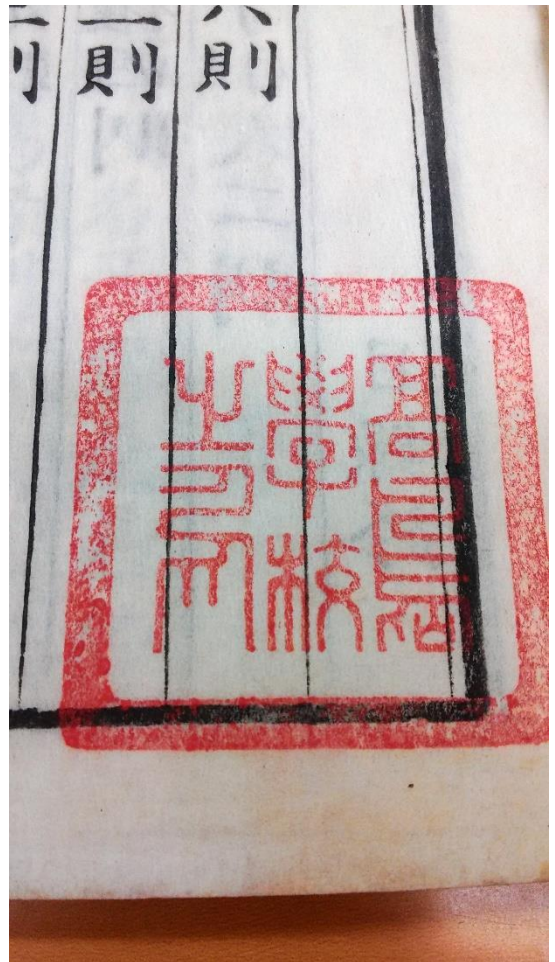


図4 蔵書印「高島学校之印」

「学知アーカイヴ」としての藩旧蔵古典籍」シンポジウム報告

参加各位には興味を持ってもらえ、納得のいく有意義な時間を共有できたと思う。ただ、広報活動に改善すべき点があり、参加者が少ないことが残念だった。この課題は今後改善したい。

研究会、シンポジウム、資料展示などの目に見える活動は、日頃の基礎的で継続的な調査活動に依存している。白井と、同僚の速水教員とで主催する「藩文庫研究会」は毎週金曜日を定例の調査日とし、学外の調査と大学図書館の調査を半々として、今年度で活動開始から5年目となる。藩旧蔵古典籍に興味や関心を持つ方々との関係も広く深くなり、様々なかたちで成果を出せる時期が来ているが、今後とも継続して調査活動を続けたいと思っている。

注

- 1) 翻刻が長野県教育史刊行会編（1972）『長野県教育史 第七巻 史料編一 明治五年以前』長野県教育史刊行会の328頁にある。白井・速水（2017）には「2016年10月に「藩文庫研究会」が所蔵機関とされる諏訪教育会を訪問して原史料を探索したが、残念ながら発見できなかった」と説明したが、今回のシンポジウムで信州大学大学史資料センター特任教授の福島正樹氏より原史料のコピーを頂戴することができた。感謝申し上げたい。

参考文献

- 白井純・速水香織（2017）「「藩文庫」調査報告—高島藩の場合を例として—」『信州大学人文科学論集』第4号、信州大学人文学部
- 信州大学附属図書館教育学部分館編（1989）『「旧長野師範学校所蔵図書」及び「信州諸藩の藩校図書」目録』
- 高橋良政編（2004）『高遠藩進徳館蔵書目録』、高遠町図書館
- 滝澤貞夫（1989）「松代文庫について」『松代—真田の歴史と文化—』第2号、真田宝物館